

一第36編一 弁護士と建築家が近代化した湯治場

フランスとドイツの国境に沿い、南北に太く長く流れるライン川。その西側に連なるのがフランスのヴォージュ山系、東側に展開するのがドイツ、シュヴァルツヴァルトの森だ。太古の昔には一つの大きな山脈で、隆起した尾根が陥没してライン川が生まれた。その西側流域の細長いアルザス平野から急峻なヴォージュ山系を越えるとゆるやかな丘陵地帯が広がり、パリ盆地へと続く。このロレーヌ地方の地層の襞の間から湧き出る豊富な温泉、鉱泉は昔から遠くローマ人にも知られ、硫黄を除く多様な鉱物質を含んだ湧水の治癒効果は知る人ぞ知るところであった。

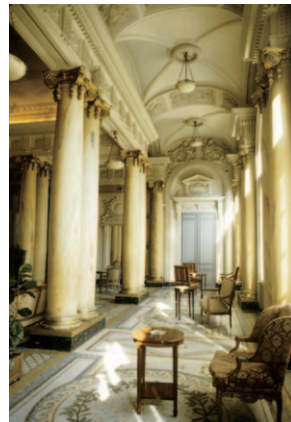


写真36-1 グランド・ホテル内のホール

さて、ルイ・ボナバルトのクーデター^{*1}（1851年）はヴィッテル^{*2}を近代的な温泉保養地とするきっかけとなった。その頃地方の司法官に任命されていた弁護士ルイ・ブルミエ^{*3}は、立场上後のナポレオン3世を支援して失敗し、投獄され体を壊した。ヴィッテルの鉱水が持つ効能を知り、病を治癒したこのブルミエこそ、その後の複合的温泉施設を整備した中心人物となった。ブルミエ家は

*1
Napoleon III
(Louis-Napoléon :
1808~1873)

*2
Vittel: 仏ヴォージュ
県の小都でローマ時代
からの温泉地

*3
Louis Premier

「地中海クラブ」が運営にあたることになる1970年代初めまでその事業を受け継ぐが、1900年以降は今や世界的に知られるミネラルウォーター「ヴィッテル」の生産販売をここにして、まちと地域の発展に寄与したのであった。

19世紀後半、パリのオペラ座の建築家として世界に名を馳せたナンシー出身のシャルル・ガルニエ^{*4}はこのヴィッテルに逗留し、温泉施設のマスタープランを作った。カジノをはじめとする諸施設は彼の後継者によって次々と実現するが、20世紀になってやはりナンシーの建築家セルナン・セザールがスポーツ施設やホテル、病院などを手がけた。中でも国鉄ヴィッテル駅舎は出色の建築である。当時席卷していた新古典主義とナンシーを一大拠点とするアール・ヌーヴォーが合体した不思議な外観（写真36-2）だが、モザイクガラスがあしらわれた大きな楕円の天窓を頂き、美しい光に満ちた上質な客間を思わせるホール空間（写真36-3）は、そこが駅舎であることを忘れさせる。

1970年代以降、そのノウハウが世界に広まった「地中海クラブ」が引き継ぐことによって、特権的だったヴィッテルのサービスはスマートに大衆化した。そして、そこに引き継がれ保全された建築とまちの遺産は、ロレーヌ地方の大地の豊かな自然に支えられ、新たなリゾートのありようとして幼児から老人に至るまでのあらゆる階層が渾然とした、活気に満ちた様相を呈しているのである。



写真36-3 ヴィッテル駅ホール内観



写真36-2 ヴィッテル駅外観

*4
Charles Garnier
(1825~1898)